

『青少年問題』一九五四年八月（青少年問題研究会）

勤労青少年の運命と教育問題

矢口 新

一

現在の我が国の勤労青少年教育の現状をみると、根本的な検討を要するのではないかと感ぜられる。それは教育が勤労青少年達の生活や運命と何のかかわりもないような形で、すすめられているかの如く思われるからである。また勤労青少年のかなり重要な部分をしめる、都市の中小企業の中に働く青少年に対しても殆んど教育の手がのびていないのである。更に又大企業体に働く青少年に対しても殆んど本格的な教育が準備されていない。このように、将来の国民の最も広い基底をなす勤労青少年に対して、総合的な教育計画が考えられていないということは、我が国の将来の政治的、経済的、文化的発展に対して、決して明るい見通しを与えるものでないのである。今にしてこれに対して根本的な対策を樹立しておかなくては、悔を百年に残すことになりはしないか。

勤労青少年の教育について、現在最も弱い点は、彼等の生活の実態、その将来の運命の見通しが明確に把握されていないことである。そこでその教育の必要性が認識されず、或は教育をたまたま考えても、単に抽象的、観念的な形でしか考えられないのである。現在必要なことは、彼等の生活の実態と、その社会的運命をつかむことではな

いか。

国立教育研究所では、一昨年来そのような方向への研究を徐々に積み重ねつつあるが、現在までに明らかになった点について、若干紹介してみよう。ここでは一昨年研究所に臨時に併設された、青少年教育部の勤労青少年教育調査結果を紹介する。この調査は、勤労青少年の生活調査を主としたものであつて、農村及び都市の各種の青少年四万人について生活実態の調査とその将来の動向を把握しそこから教育問題を考察しようとしたものである。調査の方法としては、地域及び職域の両面から把握することとし、全国各府県から約五十ヶ町村と職域として約四十をえらび、出来る限り悉皆調査（センサス）の方法をとつて、それぞれの地域、職域の青少年の生活と運命を明らかにし現在の教育を批判しようとしたのである。

これによつてみると、まず第一にわれわれの注目すべきことは、現在農村の勤労青少年として、われわれが考えその教育も農村青少年の教育として考えている当の対象青少年が、その将来において、少くとも十年の中で考えると、農村の青少年でも何でもないということである。否、現在既に実質的に農村青少年でなくなつてきている者も多いのであつて、彼等に対して教育は依然として、農村的な教育を行っているという、全く抽象的、概念的な教育が行われているのである。

われわれが概念的に農村青少年と考えている者の中には様々な青少年がいるのであるが、それらにわれわれは、種々な類型的名称を考えてみた。例えば、現在農村には住んでいるが、それはただ住んでいるのみであつて、実際には市都の産業の中に入りこんで全く都市生活者となつてゐる者がある。村によつてはそういう青少年が八〇%以上もいる村があるのである。しかも彼等は、二十才を越すと殆んどがこゝろは都市に実際に移住して、名実共に都市生活者となるのである。

これは主として近郊村にみられる型であるが、これらをわれわれは下宿型青少年と名付けてみたのである。所がこういう青少年のいる村の青少年教育の姿は、決してこれらの動向を考慮に入れていないのであっていわば極めて一般的な形でしか教育は行われておらず、そこに教育と生活との著しいズレがみられるのである。

また、下宿型とは全く異った青少年もある。それをわれわれは抱え込み型と呼んでいるが、その理由は、その村に生まれた青少年を全部その村に抱えこんで農業生活者たらしめているからである。所が、更に仔細に調べると実はこれらの抱え込まれた青少年は、二十才をすぎると逆に村からほうり出されてしまうのである。

事実日本の農村は村に生まれたものをすべて抱え込んでおく力をもっている村などはありはしない。だからそれは当然である。とすると二十才頃までを抱えこまれていた青少年達は急にあわてるのである。いきなり農村から都市生活者となることはできはしない。そこで彼等は近代生活者としては脱落するのである。こういう村の青少年は我が国の純農村、或は山村といわれる村の中には非常に多いのである。所がそういう村の青少年に対する教育は、青年学級などをみても今農村に在るといふ理由だけでその内容方法が考えられ全く農村生活者のそれで、本当の生活、運命というものに見向きもしていない、或は全く無自覚といつてよいのである。こういう所に教育の抽象性、概念性があるのである。

以上二つの例をあげたが、この他にまだ多くの類型がある。離村型、出稼型、或は自活型等々である。こういう青少年の生活と運命とを具体的に把握して、その生活を打開する道をあたえつつ、そこで人間を育てることができる教育というものは現在成立していないのである。教育は全く形式的に、彼等の頭の上を通り越してしまふ。そこに教育

というものに対する不信も生まれ、ひいては人生に対する考え方も真実のものから外れるのである。こういう点を反省して教育がまず、彼等の運命の中に入りこみ、行きとどいた心やりをもって生活の指針を与えてやる必要があるか。農村の定時制高等学校、青年学級、青年団などに対してすべていわれることである。

そういうことができて、はじめて村の生活者として生活するものの教育もまたはつきりした姿をもつことができるのであって、地域社会の生活に結合した教育が具体的に成立つのである。

二

都市における中小企業の中に働いている青少年に対しては教育の手はどこからも差しのべられていないといつてよい。彼等はどこから都市へくるかという、農村なのである。その農村の青少年達が、企業の中で低賃金の労働力としてもっている役割は大したものである。小企業の労働者の年令構成をみると、二十才以下が圧倒的に多い。七〇%以上がそうである。このことは、この中小企業に働く青少年も二十才を過ぎると、ほうり出される運命にあるということである。そうすると、結局農村からでて来て、五ケ年間位の間、彼等は低賃金労働者となり、一日十数時間の労働をするのである。その間多少の技術を身につける者はあるが、その生活は決して教育的とはいえないから、近代生活者としての適格性をもたらさしめるような生活は行われてはいないのである。

農村から都市のこういう生活に入つて来るものは、殆んどが、農村に住むことができない運命にあるものであるから、五年間こうして働かされて、さてほうり出されて一体彼等はどこへ行くであろうか。若

しすぐれた技術と教養とを身につけたものは、恐らく大工場とか、或は大商店とかへ位置づくことができようが、それは稀であつて、そうでない者たちは、将来の生活について決して明るい見通しをもつことはできない。場合によっては、自由労働者に転落するかも知れないのである。

たとえそれ程でなくとも、彼等の五ヶ年間の生活は果して彼等を近代社会の生活者として育てているであろうか、中小企業的生活環境は決してそうではないのである。なにしろ非近代的なものが多いのである。近代的ならざるものすべてが悪いとはいえないにしても、それらが教育的に整理され、彼等を一人格として育てるようになっていないこと、即ち雑然として育てられ、雑然たるちぐはぐな物の考え方人生觀をもつて、国民としてまた近代社会の形成者として不適格な人々が生みだされるのである。

こういう前途をもつたことが極めて明瞭な厖大な数千万の青少年に対して、現在の定時制高等学校も青年学級も何等手を下すことをしていないのである。否、無関心であるといつてよい。それは現代教育が主として地域的な自治体の責任として営まれており、企業の中の青少年に手をふれることができないという形をとっているからである、勤労青少年教育のエアポケットがここにあるのである。

以上のべたような状態の中で、勤労青少年教育が考えられている限り、国家全体としてみて、彼等を将来の国民として位置づけるような教育が行える筈はないではないか。お座なりの教育となり、補助金でお茶をにごすような教育になるもまたやむを得ないことであろう。定時制高等学校といい、青年学級といい、或は労働省の管轄に属する技能者養成所といい、或は各種学校といい、すべてがお座なりの、形式的教育、形骸的教育となるのである。今望まれることは一刻も早く、

勤労青少年教育の雄大な展望と施策をもつことではないだろうか。それは実は単に勤労青少年教育の問題のみでなく、日本の全教育体制の飛躍的發展をもたらす基となるものなのである。

(国立教育研究所所員)